

特集1

「地域に根ざす」ことと
「世界に向き合う」こと

特集2

動き出した都留市における学生アシスタント・

ティーチャー（SAT）活動

つみ木広場シンポジウム

資料コーナー

トピックス

都留文科大学地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2) 学校の先生方などの教育相談
- 3) 地域のニーズに応えた貢献活動
- 4) さまざまな地域交流の連携の推進

題字 黒部行子

写真は、フィンランドの森の小さな妖精トントの人形（特集1の写真撮影・庄井良信）

都留の地域と教育

— 大学への期待 —

富山克彦都留市教育長にきく

きき手 森博俊



富山克彦教育長の略歴

昭和16(1941)年、山梨県谷村町(現都留市)に生まれる。谷村第一小学校から谷村中学(現都留一中)に進んだ後、中2以後は仙台などで生活していた。大学卒業後は富士急に勤務。50歳のとき脳溢血で倒れたが、半身にマヒを抱えつつ社会復帰。平成12(2000)年12月より都留市教育長を勤めている。

森 こんにちは。今日は先生の子どもの頃のこの地域の様子や、いまの子どもの生活や人間関係などで感じておられること、ちょっと堅くなりませんが都留市の教育改革の課題、そして大学に期待されていることなどについて聞かせていただきます。

「子ども時代の思い出」

富山 私が幼い頃、ここら辺は谷村町が中心でして、中学校(現都留一中)の方は野原というか、学校しかなかったですね。あの辺にはほとんど家はなかったです。まだ都留市になる前です。

小さい頃は遊ぶほうばかりで、“ガキ大将”がいましてね、学校から帰るとお寺へ集まって、そこで大将が全部仕切ってくれていると遊びました。夏なんかは桂川へ行つて、フンドシを締めて泳ぎました。それと“面”というのがありましてね、ガラスでできたお面、それでみて魚を突くんですよ。それくらい桂川は透き通った水で、飲むこともできました。カジカという魚がたくさんいますね、沢山取れましたよ。普門寺というお寺さんのところから下に降りられたんです。

なにしろ家に帰るとすぐみんな集まって、群れをなして遊んでましたね。今みたいに子どもが少なくなっているので、うちでも7人兄弟だったし、隣のうちでも5人とか6人とかいますから、同じくらいの年齢も沢山いるわけですよ。そばで生まれ育った兄弟みたいな関係で育ってきました。

「子どもをめぐる人々のつながり」

だから、大人の人たちとの思い出はあまりありませんね。そこで注意されたとか、ありませんね。日が暮れるまで遊んでました。ただ、晩御飯になる頃までに帰らないと親父に怒られましたね。

いまの子どもたちは、本当に個になっていますよね。一緒に遊ぶとか一緒に勉強するとかないように思うんです。大人たちも関わってこない、地域での繋がりがほとんどなくなってきたり、その辺がちょっと可哀想かなと思います。

地域でのつながりというと、祭りとかいろんな行事がありますが、今はそういうものに子どもたちがあまり出てこない。一緒に大人たちと祭りを楽しんだり、行事を楽しんだりする機会がなくなってきたりするように感じます。本当なら行事なんかのときに集まって、「あそこの家の息子は大きくなったね」だとか、そう

いう世間話が自然に交わっているといいんですけど…。

昔はお祭りなんかでは、子どもたちが集まってるような遊びをしたり、大人と一緒に笛を吹いたり太鼓を叩いたりしてましたよね。そうすると「お前はどの子どもだ?」とか、「ああ、あそこの息子かい」とかね、そういうふうに話しかけられたものなんですよ。ふだんみてないようで、結構お互いに知っていたんですね。

「都留市の教育について」

森 すこし話を進めて、都留の教育についてお願いします。

富山 私は、由緒ある歴史と伝統ある文化、教育熱心な風土といふこの地域の色をいかして、人間愛・郷土愛・自然愛をはぐくむ教育をつくっていききたいと考えています。

「この土地は昔から非常に教育熱心な町で、風土もあります。だから大学までつくってきたと思うんです。都留文大の良さをうんと地元へ広めて、都留市民にしかできない特色ある教育をつくっていくことが私たちの役目だし、それはできると思うんですよ。また、文大付属小学校というのがありますが、今は「文大付属に行きたい」と親や子どもに思ってもらえるような学校に十分になっていないように思うんです。大学の力を借りて付属小らしい特殊あるものをつくって、校区はあるんですけども、子どもたちが「ぜひ行きたい」と思ってくれるような学校にしたいですね。

森 附属小を魅力的な学校にしていくことは大切ですね。同時に、都留市には11の小中学校がありますが、これらも文大と同じ市立の学校ですから、お互いに力を出し合って魅力的な「都留の教育」をつくり、それこそ全国に発信していきたいですね。

「学生アシスタント・ティーチャーの活動について」

森 文大の教師志望の学生を「学生アシスタント・ティーチャー(SAT)」と

して小中学校に派遣し、放課後の学習支援や子どもと学生との関わりをいかした活動を試みています…

富山 SATは本当に子どもたちの力になってくれまして、親たちも教員たちも積極的に受け止めてくれています。最初は「SATはちょっとなあ…」といっている学校もありましたが、今では欲しいという学校が増えてきています。

また、障害や心の問題を抱えた子どもが普通学級に入っているわけです。そういう子たちをいかに支えていくのか。学校の中にもうまく溶け込んでもらうとか、勉強もしてもらうとか、これからはそういうことを考えていかなければならないと思います。それは現場からも声が上がってきており、SATなどをうまく活かしていければと考えています。

SATの取り組みの意義を教育委員会の方からみてみると、外部から人が来てくれるというので、先生たちが非常にやる気が出るというか、自分たちの自己啓発につながっていると思います。子どもや指導のことでいろいろ話をする機会が増え、自分はどういうことが間違っていたとか、こういう風にしたほうがいいんだとか、自分たちで考え研鑽できるんですよ。それが一番プラスですね。また、子どもたちが言うには、年が近くてお兄さん・お姉さんというような感じで、とても相談しやすいようです。精神的にも安定できて、学力の向上にもいいと思っています。

森 最後に、まとめも兼ねて大学への期待を。

富山 大学への期待というのは、大学との連携、先生との連携、学生との連携・交流そういうことをやってもらいたいと思っています。小中学校や地域にいろいろな面でインパクトを与えて欲しい。都留の地域、都留の小中学校をよくするということで、ぜひお力を貸していただきたいなと思います。

(もり ひろとし・地域交流研究センター長)

「地域に根ざす」ことと

「世界に向き合う」こと



インタビューに答える三人の高校生。左からMさん、Hさん、Tさん。

私たち（森博俊、庄井良信、田中孝彦）は、昨2005年の10月末から11月初めに、科研費共同研究「臨床教育学の展開と教師教育の改革」の海外調査として、二度目のフィンランド調査を行いました。これには、佐藤隆氏が自らの科研費研究の一環として、また森由己氏がインタビューアールとして同行しました。私たちの2003年の第一回フィンランド調査は、主にヘルシンキで、子どもの生存・成長の援助と、教師教育の内容と制度、それらを支える研究の動向を調べようとしたものでした。それに対して、今回は、北緯64度辺りのカヤーニという人口3万人ほどの町に入り、そこにあるオウル大学教師教育学科のペンティ・ハツカライネン教授とその研究グループの全面的協力を得て、地域調査を試みました。そこで調べたのは、地域の産業と人々の暮らし、子ども・若者の生活意識・人生観、困難を抱える子どもたちに対するスペシャルエデュケーションの実際、ハツカライネンらが地域の教師たちと共同して開拓しようとしているナラティヴ・ラーニング（物語学習）という学習指導の実践と理論、教師教育改革の試みなどについてでした。また、カヤーニ調査を終えた後、2日間でしたが、南部の大都市タンペレを訪れ、カヤーニでは調べ切れなかった、ネウボラ（相談所）を軸とした子育ての社会的支援の実態にも触れることができました。

カヤーニと都留は、人口から見ても、そのなかに教師養成の大学があるという点でも、共通性があります。都留の地域の子どものこと、子育て・教育のこと、教師教育のことを考える上で面白い情報になると思います、調査の一端を紹介します。

フィンランドの 高校生の語りから

森 由己

実に内容豊かに、また率直に話してくれた。その言葉が思いつくままのものではなく、生活のなかで積み重ねられてきたものであることが感じられた。

Hさん（高校3年生）は総合学校時代（1～9学年）は音楽クラスに籍を置き、今でもフィンランドの伝統的な弦楽器、カンテラを弾いている女の子であった。7学年までは友達もいなくて、孤独で寂しかったが、8学年になり友達ができ、9学年では世界や、政治や人権、自然などいろいろなことに興味をもつようになった。と言った。「孤独だった年月は私に人生についてたくさんを教えてくれた。これからももっといろいろなことについて知り、しっかりと考えた方ができるようになりたい」と言う。「あなたが生まれたとき、あなたは泣きみんなは笑った。あなたが死ぬとき、あなたは泣きみんなは泣く、そんな人生を歩みなさい」という諺を紹介し、そのような生き方をしたいと語ってくれた。

Tさん（高校2年生、女子）は語学が得意で「将来通訳か語学の先生になりたい」と言う。学校は「選択科目が多く、自分のやりたい勉強ができる」と語った。また、「幸せな人生とは、『自分がこうありたい』と思うような生き方をしていると思えることだし」、「自分自身との調和（harmony with myself）だ」と思う。「と幸福観について話してくれた。「小さい頃には友達といろんな所で、いろんな遊びをし、どの通りも、どんな場所でも知っている」、「なんでも話せて信頼できる友達もいる」と言うほど充実した時代を過ごしたこの町も、「人間関係の濃さにうんざり

することもあり、高校卒業後は大きな都市の大学に行き、落ち着く前に世界のいろいろな国を見てみたい」と将来の希望を語ってくれた。

「コンニチハ、ドウゾヨロシク」と日本語で自己紹介をし、みんなを驚かせたMさんは、武道と日本が大好きな高校2年生の男の子であった。「お母さん、お姉さんとは分かり合えるのだけれど、お父さんとはあまりうまくいっていない」と言う。だが、病気がちなお母さんにかわってお父さんと二人で家事を分け合ったり、休日用品を貸し出すお店の仕事を手伝って、森の中で一緒に働くこともあると言った。将来は「親から受け継いだビジネス・センスを活かして海外で仕事したい」とも言う。Mさんの語りからは「おとうさんとはうまくいっていない」というだけではない親子の関係が感じられた。

三人とも学校はだいたい8時から2時までで、そのあとは寝るまでが自由時間だと言う。また、家にいるとほっとし、落ち着けるが、高校卒業後は自分のしたい勉強のために一旦はカヤーニを離れたいという。三人の語りを何度も読み返すうちに、彼らのなかにはどのような風景が息づいているのだろうかと思ひ描く。カヤーニの自然や町の景色とともに友達や家族、学校での日々。それにたのしみや喜びが重なり合い「自分」をつくってきたと言える強さ。卒業後はそれぞれの未来にむかってカヤーニを離れようとしているが、かれらの語りから、この町がしっかりと彼らのなかに位置づいているのを感じた。

（もり ゆき・高齢者・障害者介護ヘルパー）

2005年の秋、地域調査のために訪れたカヤーニで三人の高校生にインタビューをした。言葉の心配もあったのだが、高校生たちはみごとに英語で質問に応じてくれた。インタビューでは高校生たちの抱えている生活感情や、過去、現在、未来の生活について考えていることを話してもらった。3人は質問をはじめて見たにもかかわらず、

社会に支えられる安心感…… フィンランドの子育て

佐藤 隆

はじめに

私たちは、今回の調査旅行の最後に「社会福祉に包まれて心地よい子育て」(『フィンランドに学ぶ教育と学力』)を執筆した藤井ニエメラみどりさんと夫のペトリさん夫妻をタンペレに訪ねた。

タンペレは、人口20万人の(ヘルシンキに次ぐ)大都市である。かつてはフィンランドの近代工業の発祥地として、製紙工場を中心とした労働者の町であったが、いまは、タンペレ大学を中心とした文化・芸術の町として有名である(ちなみに、日本でも有名な『ムーミン』についての資料・作品が収められているムーミン谷博物館もここにある)。また、「森と湖の国」フィンランドの風景を象徴する湖水地方への南西側からの入り口としてもよく知られた町である。

『ネウボラ』とは『ネウボ』(相談する)『ラ』(ところ)

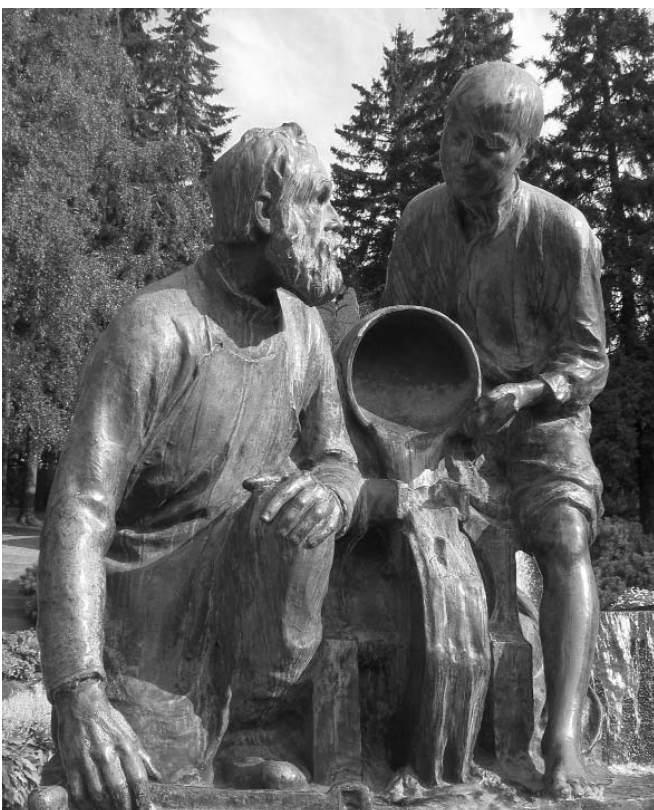
さて、私たちが訪問した日は、ちょうどペトリ夫妻の次男が二歳児検診でネウボラへ出かけることになっていった。私たちも、家からほんの200メートルほどのところにあるネウボラに同行して、話を聞くことができた。それらの話を総合するとおよそ次のように紹介できると思う。

ネウボラは、60年ほど前にできたしくみで、地域に密着して国民の健康と生活を守る機関として定着している。その主な役割は、乳幼児・就学前の子どもの健康診断や予防接種を行い、必要があれば専門の医療機関へと橋渡しを行うことである。

これだけならば、日本の保健所とそう変わらない

ことになるが、大きな違いは、まさに相談するところとして、子どもの誕生から養育にかかわるあらゆることの最初の窓口として住民に開かれていることである。たとえば、妊娠中の生活についてのアドバイスや産院のコーディネート、夫婦・家族の生活への援助(失業中の夫婦に対しては生活保護手続きの相談なども含む)、また出産後も、夫婦が育児に疲れているようであれば、ヘルパーを派遣するなど、その役割は多岐にわたっている。しかもその仕事の仕方では注目すべきは、決してネウボラが一律一方的に決めるのではなく、各人がどのような方法を好むのか、どんな要求を持っているのかをていねいに話し合い、個人の尊厳を最大限に保障していこうという姿勢を重視していることである。

まさに子どもは地域・社会の大切な宝として扱われ、その子どもを守る環境である家庭も社会によって支えられている姿がネウボラを通して見えてくる。



『保育園』・『就学前教育』・『小学校』

既婚女性の八割が仕事を持つフィンランドでは、保育園は「必需品」である。自治体はすべての「デイ・ケア」を必要とする子どもにサービスを提供することが義務づけられており、さらに就学前の一年間は子どもが小学校の生活に早くなれることができるように「エシコウル」とよばれる就学前教育も無償で提供されている。もっとも就学前教育とはいっても何か特別な授業が行われるわけではなく、朝9時から3時間程度を学校のリズムに合わせて、集団生活のマナーを学び、遊びながら言葉に親しんでいくという程度のことであるのだが。

しかし、ここでも感じられたのは、行政が住民に対して単に資源を提供し、仕組みを作ってそれで終わりというのではなく、一人ひとりのニーズにそって、その希望が最大限に叶うように配慮していることである。たとえば、すでに知られていることだが、エシコウルはその子どもの発達にあわせて就学の2年前からはじめることもできるし、教師や専門家そしてネウボラと相談しながら一年間延長すること（つまり小学校への入学を一年間遅らせること）も可能である。

こうした子育てのサポートがあることについて、藤井さんは、先の文章のなかでこう述べている。

「私にとってのいまのフィンランドは、いっしょに子どもの成長を見守り、育てていく夫に次ぐ大事な育児のパートナーである。子どもとともに私を支えてくれるこの場所で、このまま子どもを育てていきたい」。



写真6ページ下タンペレ公園の像。7ページ左：待合室。右：保育園。左下：ネウボラ。

これからの課題…フィンランドはどこへ行くのか

しかし、フィンランドにも確実にグローバル化や新自由主義の波は押し寄せてきている。私たちの滞在中にも、新聞の一面に、高額納税者の顔写真が掲載され、その下には+280、+140などというように前年に比べて何パーセント多く納税したかを示す報道があった。その多くは、株取引やリストラによって、なりふり構わぬ方法で収益を上げてのものであるという。そのために失業者が生み出されるなど、フィンランド社会にも階層格差が生まれつつあるという。また、財政削減のために公共部門の民間委託や整理・統廃合など、これまでのフィンランド社会のあり方とは異なる要素もあちらこちらに顔を出している。

こうした変化のなかでこの国の人々がなにを「守り抜くべきもの」として選択するのを見守る必要がある。

（さとう たかし・本学初等教育学科教員）



平等の教育を求めて

スペシャル・エデュケーションの展開

森 博俊

フィンランドでは、すべての子どもに平等な教育を保障するために、困難を抱える子どもに対する特別な教育が、基礎教育（小中学校の教育）の中にさまざまな形で組み込まれている。

「スペシャル・エデュケーション」というと障害児の教育をイメージしがちだが、フィンランドでは必ずしもそうではない。中心には「知的障害」「肢体不自由」「視覚障害」「聴覚障害」などによる困難をもつ子どもの教育があるが、軽い発達の遅れ*や社会的・階層的・文化的にハンディをもつ子どもなど**、種々の要因で学習困難を示す子どもたちが広く視野に入れている。したがって、「特別教育」という領域が一部の「特殊な子ども」のみを対象にしてあるというより、学校教育全体が一人ひとりを大切にしたい「子ども中心の教育」を目指しており、特別教育はそれを支える一つの柱になっているように思われる。

実際、20数%の子どもたちが、基礎教育の学習の一部で特別教育を受けている。小学校段階に限ると、じつに4人に1人が受けているのである。

どうしてこんなに多くなるのかというと、フィンランドでは、医者や心理専門家などの意見を聞き、保護者の同意のもとに公的な認定を得て行われる特別教育に連続する形で、通常の学級で、担当教師を中心に個々のニーズに対応した特別な教育が展開されているからである。認定を得た子どもだけでも7%強いるので、日本の1.5%程度に比べるとはるかに多いのだが、そのすそ野で相当数の子どもたちが、公的な認定なしにさまざまなサポートを受けているの

である。日々の実践との境界は当然曖昧になるので、その部分では通常の教育自体が特別な教育を内に含んで成り立っていると考えることができる。

他方、子どもによっては通常学級をベースに、その学校の特別クラスにパートタイムで学習に行ったり、逆に特別教育の専門教師が、通常の学級にきてサポートしてくれる場合もある。特別教育教師等の援助を得て、その子にあった「学習計画」をたてる必要が出てくるが、こうした仕事を担うことが通常の教師に求められている。なかなかうまくいかないところもあるようだが、7%の外で通常学級をベースに展開されるこのような日常的な手だてが、フィンランドの特別教育を特徴づけているように思う。

認定を得て公式の特別教育に移行する場合は、学習計画が「個別教育計画 (Individual Educational Plan)」にひきつがれていく。学習計画が通常のカリキュラムの学習を基本にたてられるのに対し、IEPは子どもに即したそれらの変更を含み立案される。そこではまた、通常学級の子どもたちとの交流や統合の



視力に障害をもつ子どものためのコーナー

あり方、必要なりハビリテーション等のサービスについて個別に検討される。通常学級での学校生活を大切にしつつも、その子どもに即した学習の保障に十分な注意が払われているのである。

フィンランドでは、通常学級をベースにした特別教育に特徴があると述べたが、それは通常の教育自体の質と条件が問われることでもある。

まず、教師が担当する学級の子どもの数が20人程度でないこと、このような手だては難しいと思われる。一人ひとりの子どもの困難は、地域や家庭での子どもも生存（福祉）と密接につながっているため、ソーシャルワークとの共同は欠かせない。また、子ども理解を深めるために、教育実践の一環に子どもも生存や発達に関し検討できる場と時間が位置づけられることも大切である。そして、本当に一人ひとりの子どもの人間的な育ちと知識やスキルの習得とを統合的に追求できるような学習指導のあり方を問うていかなければならない。

フィンランドでは、これらの課題への挑戦が、決して単純ではないがすでに試みられているように感じられた。それらの試みに学びながら、日本の特別教育の明日を考えていきたい。

（脚注）

*ことばや読み書きの遅れ、社会的な適応の難しい子どもなど
**家庭に困難があったり、少数民族や移民の子どもなど

（もり ひろとし・本学初等教育学科教員）



ユマリスキュラ小学校での数学の授業風景。「北へ10歩、東へ5歩」と、実際に歩きながら、隠されたメッセージのありかをさがし、問題を解いていく。

ナラティブ・ラーニング (物語学習)

—子どもの声を聴きとる学びの構築へ

庄井 良信

自分の物語をつむぐ学び

私たちは何を求めて学んでいるのだろうか。進学のためだろうか。資格のためだろうか。名誉や出世のためだろうか。それとも、自分の(自分たちの)人生を豊かにするためだろうか。いま、この困難な時代に、いや、そういう時代だからこそ、このように学びの意味を問いはじめている若者たちも少なくない。

学びの意味は、だれかが外から与えてくれるとは限らない。それは、むしろ自分で選びとりながら見つけていくものである。自分が学ぶ意味は、多くの仲間たちとともに世界の物語を探求しあい、その世界のなかで生き・生かされる自分の物語をつむぐことで、はじめて見えてくる。その意味で、学びは、他者との出会いと語り合いから生まれる「自己物語」のつむぎ合いだということもできる。

安心して「聴きとり語り合える」環境をつくる

2005年の10月下旬に実施した「臨床教育学の展開」に関する科研の海外調査(代表は都留文科大の田中孝彦氏)で、私たちはフィンランドを訪問し、カヤーニという北部の小都市にあるオウル大学教師教育学部で、ハツカライネン(Pentti Hakkarainen)教授と再会した。彼らのグループは、いま、子どもの遊びと発達援助に関する諸研究に基づいて、いくつかの共同研究に取り組んでいた。その一つが、ナラティブ・ラーニングという研究プロジェクトである。

「ナラティブ」(narrative)という言葉は、日本語に訳しにくい。ナラティブには、みずからの言葉

で「物語る」という意味と、その語りをじっくりと聴きとる他者がいるという意味と、そこで語られることが一つの物語(story)を持つという意味とが、すべてこめられている。安心できる対人環境のなかで、みずからの物語を、みずからの言葉で語りながら、それを聴きとりつつ語り合ってくれる他者(たち)と出逢い、みずからの思考を練り上げていく営み全体が、ナラティブ・ラーニングという言葉にこめられている。

ハツカライネンたちは、幼児や児童の学習場面で、このような営みが実現しやすい学習環境と教授法(学習支援の方法)を開発しながら、子どもたちの学びの潜在能力の発達に貢献しようとしている。力みのない「生きた言葉」でおはなしを語るものと、安心してその語りに聴き入るもの。この両者が響きあいながら、今までの既成概念が崩され、新しい概念が創られていく。このようなナラティブな学習環境とその教授法を、将来教師になりたい大学生や大学院生の研究テーマと関わらせて開発しているのが、ナラティブ・ラーニングという研究プロジェクトなのである。ハツカライネンらの教育学研究は、日本における臨床教育学の構想や、教師教育における臨床的実践研究のひとつの重要なヒントになるように思われる。

臨床教育学の問い

—自分の言葉で語り合う学びの回復へ

いま、フィンランドでは、だれがだれに勝つか負けるかという「競争」原理ではなく、むしろ穏やかに「共同」しながら学びあう教室で、人格の深いところから学びへの意欲と到達を回復していく子ども



学びあう子どもたち（ユマリスクュラ小学校の数学の時間）



誕生日を迎えた息子のために創った物語を母親（カヤーニの大学の保育園で）

たちが生まれている。PISA*で注目されたフィンランドの高い学力水準は、自分の言葉で語り合つ「共同」の精神を基盤として、教育の機会においても結果においても「平等と公正」を最優先し、教育現場の教師たちの自由裁量と自己決定をたいせつにしてきた地道な教育実践の成果でもある。

日本における臨床教育学の構想と、フィンランドにおけるナラティヴ・ラーニングの構想とは、「コミュニティを基盤にしたナラティヴ・アプローチ」という観点から、その研究関心を共有している。このような問いと、ハッカライネンらのナラティヴ・ラーニングの問いとの出逢いから、真の意味での国際的な共同研究が発展することを心から期待したい。

*OECDの国際学力調査

（しょうい よしのぶ・北海道教育大学大学院教員）



実習の学生たちと子どもたち（カヤーニの大学の保育園で）

「地域に根ざし、 世界に向き合う」教養への着目

—カヤーニの高校生の「人生イメージ」の語りを聴いて

田中 孝彦

カヤーニでの高校生の「人生イメージ」の聴きとり調査

2005年の秋、私たちは、フィンランドのカヤーニの地域調査を行い、そのなかで、三人の高校生から、「人生イメージ」の聴きとりをした。

子どもの「人生イメージ」の聴きとり調査とは、私（たち）が、「臨床教育学」の開拓のための基礎的な作業として、2000年に北海道の上ノ国町ではじめ、2002年には札幌で実施し、現在、都留でも準備中のものである。主な聴きとりの柱は、毎日の生活時間、地域観、家族観、学校観、人生設計、幸福観、自己評価、社会観の八つである。これらについて聴きながら、子どもが抱えている、現在・過去・未来の生活を含む「人生」についての全体的なイメージを聴きとろうとする試みである*。

カヤーニでは、英訳した質問項目に基づいて、約三時間にわたって、英語での半構造的グループインタビューを行った。インタビューに当たっては、森由己さんの協力を得た。

「地域に根ざし、世界と向き合う」教養の蓄積

三人の高校生の語りの内容は、本号の森由己さんの文章をお読みいただきたい。彼らの語りはそれぞれに個性的であったが、私はそこに共通する生き方と教養の質を感じた。

それを、私なりに表現してみると、彼らは、一方で、カヤーニという小さな町の自然・社会・生活・文化を心身に深く刻みながら、自らを形成してきた。同時に他方で、世界の動きについての具体的

な情報を持ち、それらに直接向き合いながら、カヤーニとフィンランドの社会のあり方を考え、自分の生き方を探そうとしていた。

「地域に根ざし、世界に向き合う」とでも表現すべき構造と質の教養が、彼らの内側に相当に部厚く蓄えられているように感じられたのである。

PISSAの「好成績」の土台にあるもの

彼らは、聴きとりのあとの食事と懇談の席で、「2003年のOECDの国際学力調査（PISSA）を中学生として受けたのは私たちだった」と、笑いながら語っていた。

私は、この聴きとりに通じて、フィンランドの子どもたちのPISSAの「好成績」の土台には、こうした教養の蓄積があるということをつかがい知ることができた。そして、こうした子どもたちの教養の蓄積の背景には、独自の自然的・社会的条件を生かして、「福祉」と「活力ある経済」とをともに実現しようとして歩んできたフィンランドの人々の生き方があるという仮説を立てることができた。これは、カヤーニ調査の中でも、もっとも大きな収穫の一つであったように思う。

フィンランドから何を学ぶか

日本では『フィンランド・メソッド』などと題して、発想力・論理力・表現力・批判的思考力・コミュニケーション力を鍛える必要性和その手法を論じた本も出版され始めている。しかし、そうしたフィンランドへの関心の持ち方は、フィンランドから本当に学ぶべきものを見落としてしまうのではないだろうか。

この地域の『カイナー新聞』は、私たちの訪問を報道した。その見出しは「日本の大学教授たちがカヤーニの若者の考えを聞いた」となっていた。日本からやってきた私たちが、ビジネスの話をするのでなく、「PISSA世界」の「秘密」を探ろうとするのでもなく、高校生たちと会って、彼らの生活観や地域観や人生観について、長時間のインタビューをしたことは、カヤーニの人々にとっても興味深いできごとだったようである。***

*この聴きとり調査の記録は、「臨床教育学と教師教育・研究資料集Ⅲ」（科研費共同研究「臨床教育学の展開と教師教育の改革」の内部資料、2006年3月）に収められている。
**子どもの「人生イメージ」の聴きとり調査の発想・方法意識については、北海道大学大学院教育学研究科臨床心理学研究グループ編『教育臨床心理学研究』第3号（2001年8月）と、そのなかの田中「子どもの生存・成長と『人生イメージ』をめぐる問題」及び葛西康子「調査の設計」を参照されたい。
***KANUN SANOMAT, 2005/11/29



カレワラを語る校長先生（ユマリスキュラ小学校で）

（たなか たかひこ・本学初等教育学科教員）

動き出した 都留市における 学生アシスタント・ ティーチャー (SAT)活動

SAT(サット)は、都留文科大学の教師志望の学生が市内の小学校や中学校に赴きアシスタント・ティーチャーとして活動する、現場と大学と都留市が共同で取り組んでいる試みです。昨年度より始まった試みで、100名を超える学生たちが、「学生アシスタント・ティーチャー」として現場に入っています。学生は、放課後の時間を使い、小グループで子どもたちの学習支援をしたり、授業時間中に補助的な教師として、あるいは個別的にかかわりながら、子どものサポートをしたりします。

これらの活動を通して、都留の小・中学校の実践のよりいっそうの発展と、大学の教師教育の充実の両方をねらっています。また、これらの取り組みのなかで、大学と教育現場の連携が進むことを願っています。

「現場体験」が深める、 学生の「子ども理解」

筒井 潤子

SAT(学生アシスタント・ティーチャー)の活動が本格的に始まり2年目を迎えました。今年度からは、都留市内の全小・中学校(11校)が参加しています。「学校参加」では、受付と同時に定員に達する対象学校が出てしま

い「参加しなかったのに」と、あきらめる学生が出たところもありました。学生たちの、現場での体験的学習への要求の強さを改めて感じ、教師教育全体を見通した上で、より良質な系統だった実習的・体験的学習環境の整備が求められることを痛感しました。

SATの活動は、2つのコースに分けられています。一つ目は、先ほどもふれた「学校参加」です。これは、全学の学生を対象にしたもので、放課後の時間を利用した小グループ活動への援助を行うものです。学生が数名の子どもたちのグループを任せられ、学習と

遊びを取り混ぜながら、毎回の企画を考案し実践した学校や、学習へのきめ細やかな個別援助を中心に行った学校など、その活動スタイルは様々でした。昨年度、今年度ともに、のべ100名を越える学生が参加しています。

もうひとつは、「臨床教育学フィールドワーク」です。こちらは初等教育学科の臨床教育学コースの学生を対象にしたもので、「困難を抱えた子ども」への個別支援を目的としています。昨年度は、保健室登校の生徒との関わりや、





発達障害をもつ子どもへの援助などのほか、ひとつのクラスに継続して関わりながらの活動など、こちらもその活動スタイルは学校の状況にあわせて様々でした。昨年度の参加学生は23名、今年度は27名です。何人かの学生は、昨年度の活動終了後も引き続き関わりをもたせていただき、遠足など行事への参加をさせていただいたり、この活動をきっかけにしてつながりを深め、体験の場を広げています。

学校という場に暖かく迎え入れられ、先生方に見守られながら、子どもたちと「生」の関わりを体験した学生たちは、自分の役割や立場をあれこれ模索し試し、様々な視点に立つことによつて子ども理解を深めてゆきます。教師からの学習援助の要望と、子どもの甘えたい思いの狭間で悩みつ、子どもへの共感、自分の役割の自覚、そしていろいろな人々との関わりの中で子どもたちが成長してゆく、ということの实感を肌で感じ取ります。不登校の子どもに関わりたい、けれどそう簡単には関わりを持つことができない。その欲求不満の中から、子どもの心に関わることの難しさや、待つということの意味を感じ取ります。学生たちは、「教育実習とは全く違う体験だ」と言い

ます。「教師」という役割に縛られることのない、この「あいまいな」役割の体験が、学生の子ども理解・自分理解を深めてくれるように思います。

これからのますますの充実のために、残されている課題はまだ多くあります。その最も大きなものは、学生への支援体制の整備です。「学校参加」では、本年度から「都留市サポートチーム」の方々の協力を得て、直接学校に向いての指導が始まり、確実な進展を見せています。「臨床教育学フィールドワーク」では、ケースカンファレンスの定例化を試みてるところです。また、学校現場と大学との連携の中で、個々の子どもを視野に置いた、丁寧な援助のあり方への共同の模索が始まりつつあり、これも実習内容の充実と絡んで重視してゆくべき課題です。

先生方には、学校現場の並ではない忙しさにもかかわらず、またシステムも十分に整っていない中で、学生たちに細やかな配慮をいただいていることを心から感謝いたします。そして、今後引き続き、この活動を契機とした協働が発展してゆくことを願っています。

(つつい じゅんこ・本学初等教育学科教員)

私が気づいた

こと

北村 笑子

私は週2回中学校に行って、保健室

登校の女の子と一緒に過ごしましたが、学習支援に行くはずだったのですが、だんだん彼女は勉強を嫌がるようになりました。中学校の先生たちも私も、彼女が私に慣れてきて、甘えが始めたのだと思っていました。しかし、いくらなだめずかしても叱っても、一向に勉強に取り組む姿勢は見られません。どうしたら勉強をしてくれるだろうか…」と我が子のこのように悩みました。彼女とは学校のことや、友達のこと、趣味のことなどいろいろな話をしましたが、一度「じゃあ勉強を始めようか!」と言うと、私に背を向けるのでした。そんなことを何回も繰り返すうちに、私は彼女が学習支援など求めていないのではないかと思うようになりました。そう思ったのは、勉強をしているときより、むしろ、他愛もないおしゃべりをしているときの彼女の方がいきいきしていたからです。そう思って勉強を強要するのを止めてからは、私も心が軽くなりました。学習支援を求めている子には勉強を

教えてあげればいけれど、彼女は多分違ったのだと思います。そのことに気づけたことが、私にとってはすごく勉強になりました。そして、自分のこのように悩んでも答えが出ないのに、少し距離を置いてみると、光が見えてくることもあるということがわかり、いい経験になりました。

(きたむら しゅうこ・本学初等教育学科4年)

障害児学級の

子どもとの

出会い

功力 美絵

昨年の6月から、SATとして学校現場に入ったことは、とても貴重な経験になりました。SATの活動を通して、自分はまだ未熟であることを実感し、これからの自分自身の課題も見えてきました。

いろいろ学んだSATの活動ですが、一番大きな意味を持ったのは、子どもたちに関わったことであると思います。私の場合は、通常学級2クラスと障害児学級に関わらせてもらい、いろいろ

な子どもたちと触れあうことができませんでした。とくに、大学で障害児教育を勉強している私にとって、障害児学級のある子どもとの出会いは、大きな意味をもつと思います。私は最初、子どもの気持ちも考えず、自分の思うように動かそうとばかりしていました。しかし、この子は私の思う通りには、どうしても動いてくれません。そんな子どもに出会って、私の考え方は少しずつ変わりはじめました。子どもの気持ちを理解しないことには、私と子どもの関係は何も変わらないのではないかと。その子の要求を受け止めると、今度は私の要求を受け入れてくれることが何回かありました。私はこの子から、子どもの要求を受け止めて接していくことが大切だということを感じることができました。

約7ヶ月間、時には子どもと楽しく遊んだり、時にはどうしようかと悩んだり、有意義な時間でした。これから子どもに関わっていく時には、SATでの活動を思い出し、子ども理解の課題を考えながら、丁寧に関わっていきたいと思います。

(くぬぎ みえ・本学初等教育学科卒業生)



たった2回の 経験では あるが…

木村 実希

私はSATの活動のなかで、不登校の女の子と関わりを持つことができませんでした。内容としては、不登校の女の子の家に訪問し話し相手になるというものでした。彼女が会いたくないときは無理に会う必要はなく、勉強も気が向かなかつたらしなくてよい、無理だと思つたら時間いっぱいいる必要はない、といった説明を聞かされた後、期待と不安が入り交じつた複雑な気持ちで彼女の家に向かいました。

私を受け入れてくれるだろうか、受け入れてくれたとしても話をしてくれるだろうか、と緊張していたのですが、彼女は私ができることを以前から楽しみにしてきてくれたようで快く受け入れてくれました。初めのうちはどう接していかがわからず戸惑いましたが、話していくうちに彼女に変化が見られるようになりました。笑顔も増え、だんだんと自分の気持ちを言葉で表現してくれるようにもなりました。初めは私自身も肩に力が入っていて気負いすぎ

ていた部分がありました。だんだんと「私と過ごす時間を楽しいと感じてくれるようにしたい」と思うようになりました。そして、なるべく彼女と同じ目線でじっくり話をしようと思いつつ、一杯彼女と向き合ってきました。後に彼女のお母さんから聞いたのですが、彼女は私と関わる時間を楽しかったと言ってくれたそうです。私にとってこんなに嬉しいことはありませんでした。彼女に会うことができたのは実質2回だったので、私にとつてはたった2回でもその何倍にも感じるほど貴重な体験でした。

(きむら みき・本学初等教育学科4年)

悩みながらの 実践

新沼 由梨

私は小学校でA国籍児童の日本語指導として活動した。最初はめつたにない機会だ、楽しそうだという軽い気持ちで担当を立候補した。しかし、思つたよりも児童に通じる日本語は限られ、日本語を指導することが難しかった。児童には、簡単な単語や日常生活のありふれた日本語しか通じなかったのだ。

こんな状態で大丈夫かなと、とても不安になった。

さらに、周りの児童からの大きなブレッシャーがあった。「先生はA語が話せるんでしょ？日本語に訳して。」などと言われたのだ。周りの児童は、私がA語を話せて日本語に訳してくれるSATなのだと思つていたようだ。言われる度に、きつと周りの児童もそのような専門の先生が欲しいのではないかと思つた。

A国籍の児童に日本語が通じないばかりに、周りの児童がその子と話す機会が少なくなっている。そのような事実を目の当たりにして、私がこの児童にしてあげられることは何かと考えた。

考えた末、辿り着いた答えはコミュニケーションをとつてあげられる存在になるうというものだった。学校という社会の中にコミュニケーションをとれる存在を求めているのではないかと思つたからだ。言葉は伝わらず、日本語指導という本来の目的に沿っていないかつたかもしれない。しかし、コミュニケーションをとれる存在が増えることで、少しは支えになるのではと思つた。悩みながらもSATは私にとつて素晴らしい貴重な体験になった。自分の成長を感じることができた良い活動だったと思う。

(にいぬま ゆり・本学初等教育学科4年)



教育現場に 学生を 受け入れて

村上 憲司

「早くSATの時間が来ないかな。」
「今日のSAT楽しかったね。」

子どもの声が聞こえてきます。今春から始まった新しい制度は学校現場に爽やかな風を送り込んでくれました。教育実習とも異なるA・B両タイプのSATは試行錯誤の中進められてきましたが、子どもの声でもわかるように大変有意義な活動となりました。

Aタイプは授業でわからなかったところを教えてもらう、難しい宿題の援助をしてもらう、といった学習支援が主な内容でした。ただ本校では、人と人とのふれ合いが少なくなっていることや子どもの遊びが減っていること等も考え、活動内容を学習活動とふれあひ活動の二本立てにしました。このAタイプは学生主体の活動が基本です。学生も任されたことで責任を持ち工夫した取り組みを行ってくれました。児童はもちろん保護者にも大変評判の良い活動となりました。

Bタイプは、毎週火曜の午前中に5名の学生が来校し、高学年のクラスに所属して個別支援やT・T（チーム・ティーチング）などの学習活動を行いました。こちらはクラス所属ということで子どもたちとのつながりが強く、児童理解という面ではAより効果的でした。しかし毎週同じ授業時の参加であったため、学生の専門性（臨床）を生かすまでには至らず、学生・学校側ともに満足する結果とはなりませんでした。学生は決められた時間はもちろん、早くから来校し遅くまで熱心に活動してくれました。毎週の活動で学んだことや直面した諸問題が将来の教職への貯蓄となったはずです。また受け入れ側である私たち教職員にも、学生の若さや情熱をストレートにぶつける姿を

目の当たりにして、意を新たに子どもと接していきこうという相乗効果が出ています。

制度一年目、大きな成果で終了しま

した。次年度は更に充実発展する活動となることでしょう。

（むらかみ けんじ・禾生第一小学校教諭）



SAT前期を 終えて

渡邊 史江

ちょうど二年前、まだ私が学生だった頃、学習チューター(今のSAT)をしました。今のSATとは違い単位になるといってではなく、ボランティアでした。私がやるうと思ったのは、

今の学生とほぼ同じで教員志望であり、学生のうちに少しでも現場を経験し、多くの体験をしたいからでした。最初は私も何をやらなければならないのか、何をすれば児童にとって役にたつのかわかりませんでした。でも悩んでいても何も解決はしないと思い、試行錯誤しながら、いろいろと試しました。児童も最初はこの人は誰なんだろう、どういう人なんだろうなど警戒していて、なかなか意思の疎通ができなく、思うようにいきませんでした。私はまずは自分のことを、理解してもらおうという姿

勢で取り組みました。そうすると児童たちも自分たちから近くへ寄ってきたり自分のことをわかってもらおうと、自分の事や、勉強のわからない所など進んで話をしてくれました。

私が教育実習や、学習チューターで一番に学んだことは、児童の話を聞いてあげる、気持ちを理解してあげることでした。勉強を教える事は一番に大切なことです。ただ勉強は一方的にこちらから、押し付けても何の意味もありません。人間関係なしでは、勉強を教える・学ぶということは成立しない

と思います。

私は、学生の時に学習チューターを経験し、今度は教員の立場からSATの活動に携わることができて、いろいろな見方をすることができました。学生が学校に望んでいること、学校が学生に望んでいること、児童が望んでいること、やってみないとわからないことがたくさんありました。私が今の立場から伝えたいことは、自分の経験から、SAT活動をぜひ多くの学生に経験してもらいたいということです。学生にとっては、将来の予行練習になり、(学校側)児童にとっては発展的・補足的な学習を得ることができ、とても貴重な活動です。お互いに意見を出しながら、今以上にいい活動になるようにしていけたらと思います。

(わたなべ ふみえ・東桂小学校教諭)



平成18年度 現職教員教育講座について

今年度は8月2～4日の3日間、「教師の子ども理解と学習指導」というテーマのもとに6つの講義を開講しました。ここ数年続けてきた「困難を抱える子どもの理解」を中心テーマに据えた内容を一步進め、今回は子ども理解を深めつつ、その子どもたちと向き合う学習指導のあり方に踏み出すことを意図しました。

また、本講座とは別に、初等教育学科理科教室による特別講座（8月19日）も行われました。

講義内容は次の通りです。

○子どもの声を聴き取ること -12歳の子どもたちの絵本づくりから- (佐藤マチ子 東京家政大学非常勤講師)、○子ども理解と援助者のあり方 -カウンセラーの視点から- (筒井潤子本学講師)、○ピタゴラスの定理からはじめよう -数学者の考える数学教育- (寺川宏之本学教授)、○学力問題と総合学習の思想 (佐藤隆本学教授)、○特別支援教育と「子ども理解」の問題 (森博俊本学教授)、○フィンランドの教育・日本の教育 (田中孝彦本学教授)

【特別講座】○富士山-その美しさは期間限定-、○実験授業・小学校でできる「液状化実験」(共に上杉陽本学名誉教授)



以下に本講座参加者の感想（抜粋）を紹介します。

佐藤（マチ子）先生の実践にグイグイ引き込まれて伺いました。現場の子どもの状況をいねいにみとり、その上にたつての実践であったと思います。…子どもたちが表現するというこの意味、背景が、少しわかった気がします。

「書きたいことがない」、作文指導でこのような生徒が多いのが一番の悩みです。「書きたいこと」を見つける作業や、自分を見つめ感じ、書くことを、生徒と一緒にでき、作品から、さらなる子どもたちの声を聴きとる先生の姿勢に、感じるものがありました。

学校現場のいろいろな場面にあてはめてみると、筒井先生の言われる、ひとつにまとまった自分を育てるためには、安全で安心な空間での共感というものが大事であり、それを持てるように援助したり、手助けをしたりするのが我々教師の仕事として欠かすことのできないものであるということを再確認することができました。…また、現在のバラバラな自分をふり返る機会にもなりました。2学期にはこんな現状をなんとか解決したいと思っています。

数学という観点から教育についてのお話を聞いたことで、今後の現場にいかせるのではないかと思いました。今まであたりまえだと思っていたことが、実は非常にむずかしい。それは、長い歴史をもったものであることを、改めて知ることができました。興味深いお話、ありがとうございました。

（佐藤隆先生の講義は）学力観というものについて、再認識できる内容であったと思います。将来につながる学力をつける、そういった思いを子どもたちに伝えられるような学習をさせていきたいと思っています。



ただ今の日本社会に求められるような知識・技能を身につけるのではなく、本当に自分で力を育てていけるような学力の大切さを感じた。

（特別支援教育に関わり）通常学級の教師が一人一人と向き合う実践を創るというところに大きな意味がある、ということに同感だと思った。…考えてみれば、特別に支援が必要な子どもをだれかがサポートしてくれるのではなく、まずは担任である自分がどのように支援するかが課題である。

学校は困難を抱える子どもを丸ごと受け止めるという（森）先生の言葉にはっとさせられました。担当するクラスには、LDやADHDと診断された子どもがいます。読字障害や適応困難にどう対処するかばかりに目がいつていました。でも本人たちが、その困難さをどのように受け止め、どう考えて、感じているか…そこに視点を向けると、子どもの困難に向き合った実践はできないと痛感しました。

（田中先生の話聞き）子どもたちに学力をつけさせるためには、学校教育だけでなく、むしろ社会のあり方が大きく関わっていると感じました。…地域・社会で子どもを育てる世の中に、日本ももう一度なっていけたらと思うと同時に、私も母として、教師として、次世代を担う子どもたちに何ができるか考え、やっていきたいです。学びを子ども自身に戻したいと日々願っています。「いらだつ」「むかつく」「消える」「死ぬ」といった言葉を教師に向けてすこむ子ども心のあり方を教育の課題にすえて、真の教養を身につけてほしいと願い取り組んでいます。今後の講座で、このようなことに関わってお話をしてほしいと思いました。

「つみ木広場」シンポジウム

つみ木広場の体験と交流の会



6月22日(木)に、木楽舎つみ木研究所(山梨県中央市)の荻野雅之さん・絹代さんご夫妻とご長男の慶昌さんを招いて、都留文科大コミユニケーション・ホール(アートシアター)にて「つみ木ひろば シンポジウム」を開催しました。主催は都留文科大地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門で、市立図書館が協力しました。また都留市保育園連合会のご協力を得ながら実施しました。

生まれてはじめてのつみ木を楽しむ大田堯先生



この企画は、昨年11月の市立図書館まつりでの「つみ木ひろば」の経験*から着想されたものです。今年の秋に子どもたちを集めて「つみ木広場」を開こう、その準備として春にシンポジウムをもとと呼びかけましたら、多くの方が関心を寄せてくださり、このシンポ自体が独立した一つの企画へと発展していききました。当日は午後1時から、主催者の挨拶につづき、荻野氏のガイドにより参加者全員で「つみ木ひろば」の体験会をもちました(2時間)。そのあと階下の軽食堂に移動し、今泉吉晴氏(本学名誉教授)の司会のもと、お茶をのみながら意見交換会をもちました(1時間40分)。

このつみ木の材はヒノキの間伐材を活用したものです。シンポの前半はそのよい香りや手触り感も味わいながら、つみ木遊びをみんなで楽しもうというもので、参加呼びかけの段階から大人たちをもわくわくさせるものがありました。

会場の広さの関係から参加人数を限定せざるをえませんでした。つる子どもまつりや臨

床教育などの学生・院生・卒業生、保育園や児童保育の方、小学校教員や親御さん、図書館職員や図書館ボランティアの方、社会教育施設の方、市役所職員、市民、国土交通省甲府河川事務所の方、東京の民間企業の方、さらに(仕事上参加時間は限られましたが)都留市立病院長といった多彩な層の方が参加してくださいました。本学教員も、教育学、美術、都市環境設計、環境生態、社会教育、といったさまざまな専門分野のメンバーが参加しました。

また望外のことでしたが、都留文科大元学長の大田堯先生もご参加ください(88歳で嬉々としてつみ木を楽しみました)。さらには大田先生が実践されている広島県本郷町の「ほんごう子ども図書館」から吉田達也館長たち6名の方もかけつけてくださいました。総計97名の参加によるシンポとなりましたが、事後のアンケート用紙には、それぞれ瑞々しい喜びの思いが綴られていました。

なおこのシンポの準備と実施にあたっては、地域交流研究センターとつながりをもつ本学の学生や大学院生たち多数が手助けしてくれました。

「つみ木ひろば」という遊びの不思議な魅力が、予想を超えた人びとの出会いをもたらしました。この経験は、また新たな交流を生み出していくことでしょう。

畑 潤(主催責任者)

* (はたじゅん 本学社会科学科教員)

地域交流研究センター通信「9号を参照してください

「つみ木広場」の 体験会

戸村麻衣子

私は、都留文科大学コミュニケーションセンターにて「つみ木広場」を体験した。体験会は初めに、工房「木楽舎」を主宰する荻野雅之さんや奥さんの絹代さんらがつみ木を参加者に流しかける「つみ木のシャワー」を行い、檜の良い香りに包まれて始まった。わずか3センチからなる楽つみ木（立方体、台形、板）を使い、参加者が円形状の建造物や巨大な魚を作り上げた。最後に一つ一つの作品をつみ木で繋げていった。出来上がった作品を2階から見下ろすと一つひとつの作品が繋がり壮大な世界が創り上げられ



つみ木のシャワーをあびる



「ともかく自由に作ってみてください」と荻野さん

ていた。

荻野さんは作品を見ながら、「小さなものが集まることによってこんなにも素晴らしいものとなる。何一つとして不必要なものはない。つみ木を通して子どもたちにこのことを伝えたい」とおっしゃった。私は体験会を通し、荻野さんの、人やもの、環境を大切に思う優しさに溢れた言葉を聞き、その人間性に触れ、子どもたちにもこの体験をさせてあげたいとつくよく感じた。

(とむら まいこ・東桂保育園保育士)

思い起こすこと

渡辺ふく代

今回のつみ木広場に参加させて頂き、一番難しかったのは「子どもに帰る」ということでした。日々子どもに接する生活を送っている私だが、いざ自分が創造力を働かせて色々な物を作り出そうと考えたときに、考えるという頭だけが先行してしまっていた。しかし、積み始めると周りが見えなくなる程自分の世界にのめり込めるすごい物である。ふと、幼い頃に父の材木置場で木片を集めて遊んでいた頃を思い出した。

つみ木広場は3種類の材料で成り立っているという観点、作り上げたつみ木を崩すことで既成概念が捨てられ否定した自分から次に進めるということ、一つひとつの作品に対してけつして否定をせず、全てが大丈夫という包み込むような表現をされること、最後は全体をつなげることでみんなの中に自分のものがあるという安心感を持つこと。私にとっては、「目からウロコ」という表現が一番正しいのではないかと思う。自分自身子どもに対して見直していきたい。

(わたなべ ふくよ・東桂保育園保育士)

檜の神様 ありがとう

天野万知子

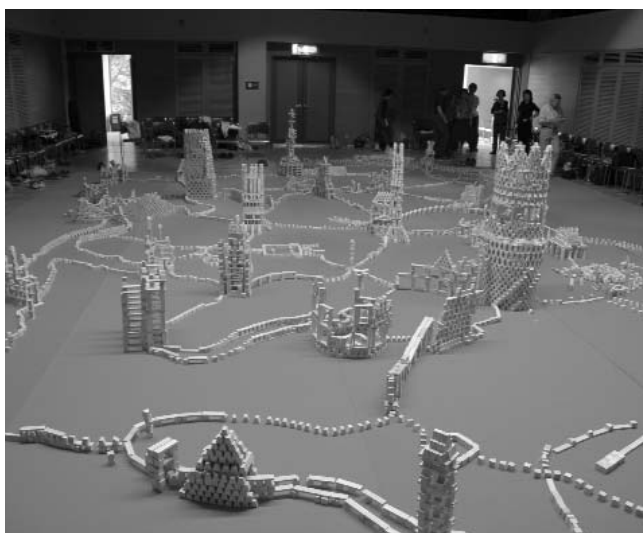
6月の下旬に、木楽舎つみ木研究所の荻野雅之先生に、積木遊びの活動の講師をお願いしようと電話を入れました。南都留地区ことばの教室（下吉田第二小学校内）で、10月21日（土）に親子レクリエーションを予定しているからです。この日には、通級している児童が作っているジャガイモを使って作るカレーも食べるようになっていきます。その旨、荻野先生にお伝えしましたら、「僕は、基本的に、イベントはお引き受けしていません。」とのご返事。申し込みの時期も早いしおそらく依頼を断られることはないだろうと思っていた私にとって、意外な返答だったので、受話器を持ったまま、正直言って戸惑っていました。30分程だったでしょうが、荻野先生とやり取りしているうちに、自分のあまりにも浅はかな行為に気づきました。その日は、「木楽舎の目指す積木遊びとはいったい何なのかを、ホームページなどで調べてみます。その上で、改めて連絡させて頂きます。」と伝えて、電話を切りました。

そして6月下旬に都留文科大学で積木遊びの会が開催されるということを知り、「親の会」の会長さんと一緒に参加してみました。次の一文は、その参加のあとに木楽舎のホームペ

ージに送ったメールです。

万物に神は宿っているものと思います。積木からは檜独特の気持ちを癒すよい香りが、また掌に載せてもほとんど重さを感じない軽やかさが、そして指先で持つとその繊細な優しさが、一つ一つから伝わってきました。角がないようにと面取りされた一つ一つの積木。莫大な量の積木。製作者の心（魂）までも感じ取ることができました。既成概念にとらわれ、なかなか軟らかい発想で積むことができませんでしたが、時間を忘れて積木遊びを楽しめました。ありがとうございました。10月21日には、富士の麓でお待ちしております。

（あまの まちこ・下吉田第二小学校教諭）



つみ木広場に 参加して

根木 直子

キンキンと、軽い金属音にも似た、木と木がぶつかり合うやわらかい音。部屋いっぱい広がるヒノキの香り。子どもの手でも軽く握りこめるほどのちっちゃなつみ木が、真っ赤なじゅうたんの上にあふれるほど広げられている。都留文科大学で行われた「つみ木広場」という催しで、私の目に飛び込んだのはこんな光景でした。

今回のつみ木広場は、私にとって2回目の参加になるのですが、つみ木というものの不思議な魅力に、改めて触れることが出来た場となりました。そこにある木片をつむという、単純に言えばこれほど単純なことはないのですが、ただ漠然とつんでいるだけではそれはちっとも生きてきません。つみあげたものを「車」にしたり、「恐竜」にしたり、「コロセウム」にしたりするのは、自分自身の誤魔化しようがない想像力が必要です。

おまけに、一人でつんでいても、つみ木はちっともいいものになってくれません。何回やってもどこか似たり寄ったりのものが出来上がりません。自分自身のイマジネーションの限界を壊すには、自分にはない新しい発想を他の人から受け取らなければなりません。自分だけではな



写真右上：みんなのつみ木をつなく 右下：第一回目のつみ木を眺める
左下：思い思いにつみ木に向う

くて他の人を見て初めて作品が自分でも驚くほど素敵なものになります。

つみ木というものは本当に不思議です。単純なのに複雑。一人で出来る作業のくせに、誰かと協力しないと本当にいい物は作れない。せつかく作ったのに壊れやすい。壊れるのに何度でもやり直せる。

頭の固い学生の私でも、「あっ！」と驚くような出来事がいっぱいあるつみ木広場。このつみ木広場を、子どもたちがやったら、どんなことを感じてくれるんだろう、どんな発見が待っている

るんだろうと考えるとドキドキしてきます。きっとそれは何万語の言葉を連ねて教え聞かせるよりも、もっと自然で、もっと多くのことを子どもたちにもたらしめてくれるような気がします。

そうして、子どもたちだけではなく、自分もまた一緒に色んなことに気づいて、成長していく、そんな活動に今後も携わっていききたいなと感じた「つみ木広場」でした。

(ねぎ なおこ・本学比較文化学科4年)

市立図書館との共催事業「自由研究ガイド」

2 006年8月6日、都留文科大フェイルド・ミ
ユージアムは、都留市立図書館と共催で、「夏休
み自由研究ガイド」という教室を開催しました。この企
画は、小学生と親子の参加を基本に企画し、誰もが楽し
める科学遊びをテーマとしました。今回は、小学校4年
生の理科で扱われる「空気」の性質を知るための「空気
てっぼう」や「音の出るおもちゃ」、「紙飛行機」などをつ
くりました。

参加者は、大人12人、子ども14人の合計26名。都留文
科大学附属小学校で学童保育をなさっている志村裕美さ
んは、「子どもたちに、自分たちが作ったものがじっさい
に動くという喜びを体験して欲しいと思って参加しまし
た。じっさいに紙飛行機や竹鉄砲を作ってみると、意外
な発見が私自身にありました。この感動や発見を子ども
たちにも伝えたい」とおっしゃっていました。兄弟で参
加した志村柚紀（ゆずき）君（小学校5年生）は、「自由
研究の課題を探しに来たのですが、今日、体験してみ
て課題が決まったのがうれしかった。自由研究は紙飛行
機を作ります。今日はいろんな物をじっさいに作るこ
とができて嬉しかった」と語ってくれました。また柚
紀君の妹の彩花（あやか）さ
ん（小学校3年生）
は、「カエル
のよう

な声を出す工作が楽しかった。帰ったらおばあちゃんに
カエルの声を聞かせてあげたい」と話してくれました。

好評だった紙飛行機制作

紙飛行機の制作には、中谷修さん（日本紙飛行機協会
浜松支部「楽しい紙ヒコーキひろば浜松」）がポランテ
ィアとして講師を担当してくださいました。最初にさま
ざまなタイプの紙飛行機を紹介。実物を見た子どもたち
から「すごい」という声があがりました。今回作った
リトルスパローという紙飛行機は手のひらに乗るほどの
小さなものですが、じっさいに作って飛ばしてみるとな
かなかうまく飛びません。中谷さんの微妙な修正を真似
ながら紙飛行機づくりを楽しんでいたようです。

鳥の面白さを語る

午後は、親子2名が参加しての「いきもの観察のおは
なし」で、本学大学院生の西教生さんが「空を見上げよ
う」と題して話をしました。どうして鳥が好きになっ
たか、鳥を観察しながら何がわかったか、などわかりやす
く語りかけるような話で、参加された親子も質問をしな
がら聞き入っている姿が印象に
残りました。

地域交流センターと 都留市立図書館



平塚市博物館との交流

文・写真 北垣憲仁

都留

フィールド・ミュージアム

ムでは、8月10日から9月1日まで平

塚市博物館で開催された「平塚市博物館ミニ文化祭」に展示を出展しました。

平塚市博物館は相模川流域の自然と文化をテーマとし、地域住民が積極的に博物館活動に参加する、参加・体験型の博物館としても先駆的な博物館です。

平塚市は相模川の河口部に、また都留市は相模川源流に位置しています。今回、平塚市博物館での企画に参加することで、私たちのフィールド・ミュージアムの活動をお伝えすると同時に、平塚市のみなさんとの情報交換と交流の機会ができればと考えました。

失われた二筋の川に着目

今回の展示では、文化3年（1806年）に描かれた「十日市場村絵図」に描かれた二筋の川に着目しました。その二筋の流れは今はありません。しかしその流れを取り戻し、そこに暮らすさまざまな生きものと出会える地域のよさを評価しようとする取り組みがフィールド・ミュージアムの大きなテーマの一つとなるからです（この二筋の流れについては、地域交流センター通信8号、9号、10号に掲載されています。参考になさってください）。

展示では

その他に、都留

市十日市場地区の湧き水

を活用した「水掛菜栽培」やフィ

ールド・ミュージアムの歴史、フィールドで構想された本やガイドブックなどを紹介しました。また、都留市所蔵の

「十日市場村絵図」については、ミュージアム都留のご協力を得てカラーパネルを制作しました。

大切にしたい交流

平塚市博物館で展示の担当をくださった学芸員の松本典子さんは、「都留フィールド・ミュージアムの展示を見て、初めに思ったことは、都留に行つて実際に見てみたい、でした。活動の内容が広く、そして都留の魅力がよく伝わってきます。ここは入り口で、中にはもっとすばらしいものがあるのではないかと、そんなワクワク感を感じました。この「わくわく感」は、展示にとつてもっとも重要なものの一つだと私は思います」と感想を語ってくださいました。また、展示期間中のノートには、「都留の地域と学生がこんなに魅力的だとは…。地域を大事にする沢山の冊子を読んでいたら、イタリアで始まったスローフードをなぜか思い出しました」などの感想が寄せられていました。

今回の展示では、字が小さく読みにくい部分もありま

平塚市博物館でのミニ展示



した。それらは今後の課題となります。小さな交流を生み出すこのような機会を今後も大切にしていきたいとおもいます。

(きたがき けんじ・編集部)

写真左：ミニ展示の様子。 右：浜口哲一氏（平塚市博物館館長）の著書『放課後博物館へようこそ』、
地人図書館。ここには、平塚市博物館の実践も記されている。

田原は古代から生活の拠点だった

生活をささえる水路址と旧河道の発見

大学をかこむ尾崎山からは、かつて人々のくらしをささえる川が流れてきた。それらの川の水源は山中の泉としていまも残る(8号・9号を参照)。最近の発掘調査で、川の実在を証明する事実が得られた。10世紀中頃に付属図書館北よりの都留児童相談所あたりにあつた竪穴住居を土石流が襲い、砂礫であお

つた。西暦864年、富士山北西麓より大噴火があり、流れ出した溶岩が刻の海をつめて、西湖、精進湖、本栖湖に分断するといふ、地域経済に大きく影響した事件もあり、さまざまな関連を想像させられる。(編集部)

多良(田原)郷の古代遺跡

奈良 泰史

1 「田原」のルーツ

都留市の「都留」や、「田原」という地名は、古代にまで遡る。

701年(大宝1年)大宝律令が施行され、地方組織として国、郡、郷が置かれた。

甲斐国(山梨県)には、山梨、八代、巨麻、都留の4郡が設置され、これらの内、郡内地域は都留郡に属し、相模、古郡、福地、多良、賀美、征茂、都留の7郷が設けられた。

これらの郷の比定地については、古くから論議が交わされてきたが、桂川の下流域から相模、古郡、都留、征茂、多良、賀美の谷郷が比定され、これらの内、「多

良」は、中世以降、田原郷と称され、現在も田原の地名や、田原の滝などがある都留市域とされている。

2 多良(田原)郷の遺跡

奈良時代以降、全国的に山間地の開発が進み、市内でも堀之内原遺跡(小形山)、中谷遺跡(同)、九鬼遺跡(井倉)、牛石遺跡(厚原)、鷹の巣遺跡(下谷)、道生堀遺跡(同)など、平安時代の集落跡が急増する。

国道139号線から天神通り線にかけての二ノ側、三ノ側地区からは、地表下に約8000年前に富士山より流出し大月市猿橋町まで達した猿橋溶岩が認められる。

この猿橋溶岩上で、遺跡が確認できるのは、三ノ側遺跡や、四ノ側遺跡などに見られるように、奈良・平安時代以降の

ものであり、溶岩が流出した約8000年前(縄文時代早期)から、奈良時代までの間は、荒涼とした生活には適さない地であつたと推定される。

しかしながら、奈良・平安時代以降、開発が進み、かつて谷村工業高校のグラウンド付近は、中世の館址の存在を示す地名とされる「堀之内」という字名が付けられていたとされ、小山田氏が谷村に進出する以前に、すでにこの周辺に有力豪族の館が存在していたことが指摘されている。(註1)

3 三ノ側遺跡―多良郷の拠点遺跡

現在の「おかじま都留食品館」の敷地から「オギノ都留店」が建つエリアは、多良郷の拠点遺跡の一つと考えられる三ノ側遺跡が広がる。同遺跡では、これまで昭和56年(第1次調査)と平成13・14

年(第2次調査)の二度にわたり発掘調査が行われている。

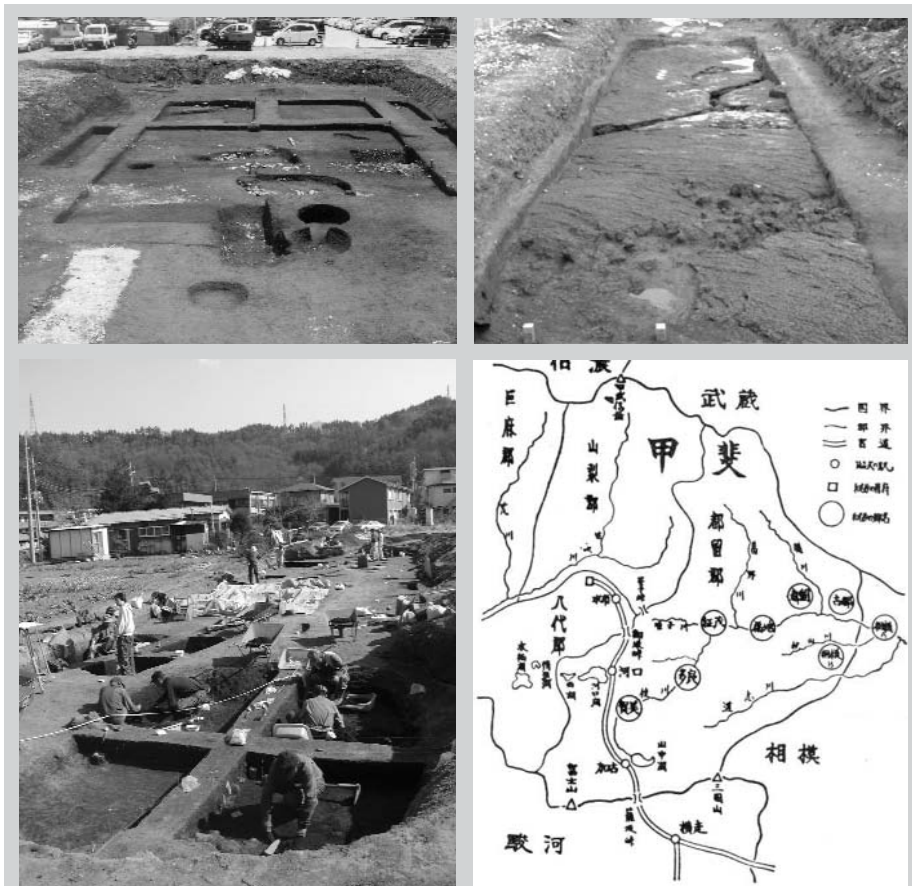
(第1次調査)

昭和56年、岡島ファミリー都留タウン(現おかじま都留食品館)の建設に伴う発掘調査が3月20日から5月26日まで都留市教育委員会によって実施され、奈良・平安時代の竪穴住居跡が5軒検出された。これらは、出土遺物より第1・3・5号住居跡が8世紀前葉期に、また、6・7号住居跡は9世紀中葉、後葉期に、それぞれ比定されるものであつた。

また、遺物では、国内最古の鑄造貨幣である富本銭に続く和銅開珎や皇朝十二銭のひとつである富寿神玉などの銭貨や、青銅製の小壺、紡錘車・鎌・刀子などの鉄製品などが発見された。これらの内、特に、青銅製の小壺は、鍍金が施されたもので、かつての所有者は相当な実力者であつたとの指摘がされている。(註2)

この他、北米銭と共に、13・14世紀所産の龍泉窯系青白磁器片が出土しており、中世期においても輸入陶器をまとめて所有できるだけの有力豪族の存在を示唆するものとなっている。

これら中世期の出土遺物は、調査区内で検出された水路址の周囲から検出されている。水路址は、幅20〜40cmほどで、砂利や小さな玉石などが深さ20cmほど堆積し、流路は東西方向であつた。



写真左上：四ノ側遺跡発見の住居跡 右上：鷹ノ巣遺跡発見の溶岩 右下：古代都留郡の郷配置図
 調査風景 左下：三ノ側遺跡C地点

(第2次調査)

田原土地区画整理事業に伴い、平成13年12月10日より平成14年5月7日まで、都留市教育委員会によって発掘調査が実施され、現在の都留文科大前駅舎（A地点）、駅前広場（B地点）、区画道路4・3・2号に（C・D地点）のそれぞれの調査区が設けられた。

調査の結果、竪穴住居跡は、A地点1軒

（9世紀後半代）、B地点1軒（9世紀中頃）、C地点3軒（9世紀後半・9世紀後半代・10世紀前半）、D地点1軒（10世紀前半）の計6軒が検出され、その他、掘立柱建物跡2棟（A地点）、土坑群（A地点101基・C地点51基）水路跡と推定された溝状遺構（A地点）が検出されている。

1・2次の調査を通じて、三ノ側遺跡

はかなりの広がりを持つ奈良時代から平安時代、中世にまで及ぶ遺跡であることが判明した。（註3）

4 四ノ側遺跡―土砂災害にあった住居跡発見

都留児童相談所建設事業に伴い、平成17年5月17日より6月27日まで、山梨県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施された。

調査面積は約550㎡で、調査によって平安期の竪穴住居跡2軒、土坑6基、などが検出された。これらの内、住居跡は出土遺物より10世紀中頃のものと推定されている。

また、2軒の住居跡を押し流すように流れ込む2条の旧河道が発見されている。ほぼ全てに小型の砂礫（されまき）が充填されており、上流部から勢いよく流下した土石流の跡で、住居跡の構築年代から10世紀中葉であることから、その直後に発生したものと推定されている。（註4）

5 まとめ

田原地区周辺は、近年の区画整理事業により、都留文科大前駅の開業を始め大型スーパーマーケットの進出などと相まって大きく様変わりを遂げている。

同地区は、東西方向に流れる用水を境とし、桂川岸から一ノ側、二ノ側、三ノ側、四ノ側という字名が付けられている。用水は、谷村藩主秋元泰朝（あきもとやすし）によって、寛

永13年から3年の歳月を費やし、田畑の灌漑（かんがい）や谷村城下町の生活用水の確保のために開削されたもので、谷村大堰（十日市場堰）と呼ばれる。堰の開削により、田畑の収穫高が増したが、上谷村は、それ以前より、周辺の村々に比べて田畑の収穫高が大きな村であった。それでは、田原地区周辺の開発がいつ頃からおこなわれ始めたのか。

近年の考古学調査から、それは奈良時代以降、平安時代から中世に及んで進められ、その拠点となつたのが三ノ側遺跡であったことが垣間見えてきた。また、遺跡内からは、水路跡が発見されているなど、水利の確保のための努力は、古代より進められていたことが明らかになってきた。調査事例の増加により、さらなる進展が期待される。

（なら やすし・都留市役所政策形成課）

註1 川鍋定男『都留市史通史編』1996 都留市史編纂委員会 297頁
 註2 甲斐博之『都留市史資料編地史・考古』1986 都留市史編纂委員会 489頁
 註3 杉本悠樹『三ノ側遺跡』2003 都留市教育委員会
 註4 吉岡弘樹他『四ノ側遺跡』2006 山梨県教育委員会

地域交流研究センターの源流をたずねる

「都留文科大学地域社会学会」の歴史

本学の地域交流研究センターのルーツをさぐる作業は、センターというものの知見をゆたかにすることにつながります。今回は、本学の社会学科に併設するものとしてつくられた「都留文科大学地域社会学会」に光をあてます。1990年度に発足してからです。本年度で17年目に入っていることとなります。機関誌『地域社会研究』は毎年発行され、昨年度で16号を数えています。ここでは、その創刊号巻末の「1990年度地域社会学会のあゆみ」を抜粋して掲載します。(編集部)

1990年度地域社会学会のあゆみ
都留文科大学に、「さまざまな問題をかかえる地域社会を研究・教育の領域として設定して、社会学を基礎にしながらも、経済や産業、自然や文化、政治や行政といった関連諸分野の学際的・総合的な研究を重視した新たな研究・教育の体制をつくり出す」ことを目指した社会学科が新設されたのは、1987年のことです。そして、その完成年度を迎えた1990年度に、研究・教育活動をいっそう充実させていこうという主旨で、「地域社会学会」を設立しました。

学会設立後9ヶ月を経過しましたが、ここにその概要を記しておきます。

- 1・発足総会・・・略
- 2・役員会・・・略
- 3・事業
〔講演会〕・・・略
〔研究会〕

10月24日の研究会「リゾート開発の現状を考える」では、社会学科の1年生・2年生4名が報告しました。埼玉県飯能市の事例報告(報告者＝小宮山直子)は、住民の利害や意識の展開(いわば環境問題の社会的側面)を丁寧に分析したもので、また都留市の事例報告(報告者＝加藤春喜・高橋洋文・雨宮美鈴)は、生態学的調査に根拠を置いた(いわば環境問題の自然的側面)の分析でした。研究会参加者は、二つの報告をとおし、これからの生活・生産をどうつくっていくかという問いかけを共有することができました。後日、充実した発表であったと市民会員(賛助会員)から便りがありました。11月6日の研究会(第二回)は、ペルシャ湾岸危機に絡んだ国会議論を取り上げ、「国連平和協力法」を考える」というテーマで懇談会を行いました。時事的な問題を臨機応変に取り上げていこうという試みで

もありました。

1991年2月6日の研究会(第三回)は、都留市民であり、尾県郷土資料館の運営に深く関わっておられる井上敏雄氏にお越しいただき、「都留市のまちづくりのヴィジョン」と題してお話いただきました。都留という名の由来など、都留市の成り立ちを歴史的に詳しく話され、さらに、市の行財政等の現状分析から自主的なまちづくりへの提言へと報告はつづき、質疑討論を含め、格好の「都留市入門」となりました。(参加者・約25名)

〔学会通信〕・・・略
〔紀要〕・・・略
「SANTYキャンパスタウン都留を創造する市民の会」との共催事業)まちづくりを考える自主的な連絡組織「市民の会」とは、今後情報交換を行ないながら可能な交流を行なっていくことになりました。1991年3月1日、3日にYLO会館で行われた「全国『水のみち・歴史のみち』ポスター展」の開催には、共催団体として協力しました。これから行なわれる「ツルトピア21」構想策定のための市民フォーラム」にも参加・協力する予定です。

4 学会活動のこれから
・・・前略・・・
さて、当学会はあらかじめ確固としたイメージをもって進んでいるわ

けではなく、事業をひとつひとつ具体化しながら「ああ、こういう可能性もあるのか」といった具合に、一步一步前進しています。そこで、この間の事業をおして見えてきた学会活動のいくつかの「芽」について、触れておきます。ひとつは、学会が、「地域問題の解明」ということを結接点として多様な関心を交流させていく機会になりつつあることです。二つめは、学会活動に少ない市民(都留市に限定されない)が積極的に参加されており、学生・教員・市民の交流の舞台が生まれつつあることです。三つめは、都留文科大学と都留市民との接点形成されつつあることです。しかしそれらは文字どおり「芽」であって、むしろこれからの「課題」とされるべきことでしょう。
・・・後略・・・



「地元学」の学びを通じて「地域に出るきっかけ」を

— 本学の「地域交流研究Ⅲ」と
山梨県「魅力メッセンジャー事業」の連携による授業 —

田中夏子

本年度の「地域交流研究」では、山梨県観光部主催の「山梨魅力メッセンジャー事業」と連携し、「地元学」を考える」というテーマの下、2回の県内フィールドワークを含む計17回の授業を7月末に終了しました。

この授業の目的は二つあります。第一は、水俣市職員の吉元哲郎氏が提唱する「地元学」を手がかりに、地域社会における「資源」や「社会関係」の存在と連鎖を発掘する目を養うこと。第二は、山梨県の魅力メッセンジャー事業とタイアップをしながら、県内の産業・仕事・文化的資源に触れ、そこに携わる人々の言動に学び、「地域との関わり方」を習得することです。

具体的には、県内で、地域づくりや仕事起こし、ものづくりの最前線で活躍している方々（表1）から、実地見学も含めて講義をしてもらうという内容です。講義や体験をつなぐキーワードは、吉元哲郎氏のいう「地元学」。地元のことを地元の人たちが外の人の目や手を借りながらも自らの足と目と耳で調べ、考え、日々生活文化を創造していく、その連続行為。その内実を、山梨を事例として学ぶことが目的です。吉元氏は、「地元学」を「だまされないうちにあるもの」と規定していま

す。「地域の活性化」は、全国総合開発計画に代表されるように、これまでは国が提起する開発政策の枠組で行われてきましたが、それは必ずしも地域社会を豊かにはしてきませんでした。逆に、人口の流出や農林業の放棄、あるいは環境破壊につながるものも少なくありませんでした。それを乗り越える視点や手法が「地元学」という言葉には込められています。

また、第二の目的のために、「地域づくり」や「ものづくり」を知識として把握するのみならず、そこで学んだことを、都留でどう応用するか、あるいは将来自分たちが暮らし、働く地域で、そこにどう積極的にかかわっていくことができるのか、そのための導手的な取り組みを、学生有志に呼びかけてきました。この授業を実施するにあたっては、山梨県観光部の丸山さんには、毎回、講師の方々の交渉を含め、大変ご尽力をいただきました。そして何より、以下の講師の皆さんに、聞き手が自らの「地域の見方」や「地域への関わり方」を豊かにするためのヒントを大変多くいただきました。心より御礼申し上げます。

（たなか なつこ・本学社会学科教員）

(表1) 2006年度都留文科大学「地域交流研究Ⅲ」「山梨魅力メッセンジャー事業」講師一覧

富士山と民族	堀内 亨氏	富士吉田市歴史民族博物館
山梨の自然生態	北垣憲仁氏	都留文科大学特別非常勤講師
富士山の動物	中川雄三氏	動物写真家
郡内織物の歴史	前田富雄氏	前田源商店 専務
山梨のジュエリー産業	松沢安行氏	ワイズジュエリー - 社長
山梨の和紙産業	一瀬美教氏	(株)大直 社長
山梨のワイン	三澤茂計氏	中央葡萄(株) 社長
山梨の都市農村交流	曾根原久司氏	NPO法人えがお・つなげて代表理事
富士五湖地域の観光	小佐野常夫氏	富士河口湖町長(観光カリスマ)
清里の観光	船木上次氏	「萌木の村」村長(観光カリスマ)
富士北麓方面	富士山五合目(自然解説) 環境科学研究所(自然解説) 富士吉田市歴史民族博物館	
峡東・峡中方面	中央葡萄酒(株) 印伝屋(博物館) かいてらす(地場産業センター) (株)かいや(煮貝製造工程)	



写真上：富士山五合目周辺の植生についてお話をうかがう。お話の途中、ニホンカモシカが現れて、一同興奮。写真下：鳥獣、とくにサルの被害に悩まされたと話す清水政男さん。高い壁を作って対策した様子をつかがう。

第3回 和服リフォーム展と ファッションショー

着れるのは着て、捨てるならリフォーム。
布との出会いが広げる地域交流

今泉 吉晴

第3回和服リフォーム・ファッションショーが5月28日の午後1時～3時、ミュージアム都留で開催された。ミュージアム都留の入り口ホールにもうけられた350人分の会場で、実行委員長、遠藤静江さんの司会のもと、古い和服をリフォームした作品をまとったモデルが登場。作品について「これは母が授業参観によく着てきた着物をリフォームしました」などとコメントをしたうえで、会場をまわって歩く。モデルの動きにつれて、歓声があがり、近くの見学者から声がかかり、あるいは手がのびて作品にふれる。会場にうちとけた雰囲気広がった。

遠藤さんの説明によると、着物はほどこいて別の形に仕立てることができると、そのようにして長く使う習慣がすたれて40～50年もあるいは70年もタンスにねむって

いる着物が多い。それらの着物は衣服の大量生産とファッション化がきわまった現在ではいわばゴミであり、思い出を持つお年寄りが処分をせまられる。そこで、洋服に仕立て直して、布の命を今に生かしてはどうかと、リフォームの相談会を始め、参加者たちと子ども服をふくめて作品を作ってきた。

すると新聞報道などもあって150人も参加者があり、ファッションショーをしようという声があがった。最初の年は遠藤さんの自宅を会場にして開催した。だが、見学者があまりに多く、ミュージアム都留の市民参加の展示会というところで会場を移したという（あわせて120点ほどの作品を1週間展示している）

和服をリフォームする相談会は数人単位で一日がかりで行う。あとは各人それぞれに仕上げている

から、ファッションショーに出演する日が、参加者（モデル）にとつても一同に会する最初で最後の日である。これまでの最高齢は86歳。見学者とも当然、初めてなのであいである。ところが、モデルが歩みをすすめるにつれ、そここで声がかかり、リフォームした作品をめぐって交流が生まれる。ものの価値が引き出され、参加者への思いが表現する。遠藤さんによると人前に初めて出るお年寄りも多い。だが、まるで爆発するかのように自分の中の思いを出していく。

関口幸恵さんらによる詩（リフォーム）の朗読などもあって、ショーの全体が見事な一つの芸術表現になっていた。

（いまいずみ よしはる・本学特別非常勤講師

編集部）



リフォーム作品133点の展示にあわせて、それらの制作者がモデルになって着てみせるショーが開かれた。実行委員長遠藤静江さんは、「衣服のなかに人間がいるかどうか、それで全然違います」「私たちはリフォームをファッション化したいのではなく、本当に古いものを大事にし、再生していくという原点を守りたい」と語った。

写真左上：みんなびっくりのリフォーム長襦袢。 右上：若々しい都留文科大学生の着こなし（マイクを持つのが実行委員長の遠藤静江さん）。 左下：生地も人も生かされて喜んでいます。

地域に「気にかけてもらえる存在」 としての田んぼ

昨年に引き続き、「田んぼクラブ」では、市内の田んぼ約600平米をお借りして、米づくりを行っています。本年も、都留市農業委員会、旧農業改良普及センター（現農務事務所）、市の産業観光課の皆さんの尽力で、播種、代掻き、田植え等の作業をおこなってきました。今年はもちろん、こうしたイベント的な取り組みに加え、稲の日常的な管理「水見」に挑戦することとし、学生たちと週一回ずつの当番制を組みました。通学の傍ら、田んぼに立ちよって朝夕の水入れを行い、稲の生育状況をチェックするというこの作業は、「農業体験」の中でも本質的な部分です。「水見」を始めてみると、朝の散歩をなさっている方や、近くでお店や農業をしている方々が、「取り口の成長がよくないね」とか「沼かきはいつ？」など、たびたび声をかけてくださり、この600平米の田んぼを、地元の方々がずいぶん気にかけてくださっていることが伝わってきます。学生たちは、イベントでの交流とはまた一味違った「普段着の交流」を感じ取っているようです。

以下の文章は、水見や、農業委員さんへのインタビューを行った3名の学生が、その感想を記してくれたものです。

（本学社会科学科教員 田中夏子）



田んぼを通し学んだこと

奥田恵理奈
中込綾
堀内さやか

5月に田植えをしてから始まった水見当番も2ヶ月を迎え、その間稲は着実に大きくなりました。

田植え後、農業委員さんから水見についての説明をいただきました。正直なところ、週に一度とは言っても、朝と夕方に田んぼに行かなくてはいけないのは、最初のうちは面倒でした。しかし何回か見に行っているうちに、稲の生長が見えてきたり、田んぼに棲む生き物たちを発見したりして水見がだんだんと楽しくなってきました。水見は土曜日、日曜日は当番がいません。なので、月曜日になると水が入っておらず田んぼが干上がっていた、ということもありました。私たちが困っているのを見て、田んぼの近くのパン屋さんのご主人が水入れを手伝ってくださいました。このように地域の方々とコミュニケーションをとりながら稲を育ててゆく大切さを実感しました。

それはつい先日インタビューさせていだいた農業委員の清水正雄さんのおっしゃっていた言葉にも通じるものがあるのではないかと、と思いました。『皆で協力し、時には教えてもらい実践する』…。

まだ稲刈りまで時間があります。その間きつとハブニングも起きるでしょうが、皆で乗り越えて行きたいと思っています。田んぼに関わっていただいている農業委員さん、市役所の皆さん、そして地域の皆さん、これからもよろしく願います。

（おくだ えりな、なかごみ あや、ほりうち さやか・本学社会科学科1年）

社会科学科1年

大型獣との共生を考える田植え

北垣 憲仁

6月3日、十日市場の中屋敷にある水田で、地主の渡辺宗男さんに指導していただきながら田植えを行いました。学生は11名が参加しました。

中屋敷の田には、イノシシやサルをはじめ、さまざまな動物たちがやってきました。もちろん収穫も大きな目的ですが、草取りや水の見回りなども自分たちで行いながら、動物たちとの共生を実地に考えていこうというのが、この田植えのテーマです。

過去2年の試みでは、収穫を目前にしてほとんどをイノシシに食べられました。今年は、7月9日と8月6日に草取りを行いました。

このところ田の様子が気になるのが、田植えに参加した学生が頻りに田の見回りをするようになりました。「イノシシの足跡がありました」「サルに出会いました」など、動物たちとの出会いの体験を話しながら、収穫を心待ちにしているようです。

（きたがき けんじ・編集部）



比較文化学科講演会

リンハオジュン

林豪勲さん・林清美さんの講演会

リンチンメイ

「僕の生きてきた道

—『台湾原住民族』プユマの視点から—

2005年12月16日

イサオさんの死と遺された夢

山本 芳美

2006年4月15日、林豪勲^{リンハオジュン}さんは急性肺炎にて死去された。講演は、壮大な旅の途上でのものである。オーストラリアから南太平洋の島々を船で訪ね、日本の横浜に上陸し、山梨、東京、京都、香川を車で訪ねた後、大阪から船で那覇と石垣に立ち寄り、台湾に戻る予定であった。音楽葬にうかがったとき、長年過された二階の部屋から太平洋が見えた。寝つけずにいると、灯台の明かりを一つ、二つと数えたそうだ。東京での体調の悪化のために、船旅への思いをとどめてよかったのか、今も問い返している。

(やまもと よしみ・本学比較文化学科教員)

講演会の感想

富田 尚也

林豪勲^{リンハオジュン}さん・林清美^{リンチンメイ}さんの講演会、「僕の生きてきた道 『台湾原住民族』プユマの視点から」が2005年12月16日に行われた(主催・都留文科大学大学院文学研究科比較文化専攻)。講演会では、現在車イス生活をおくる勲さんが27歳の時に脊髄を損傷してからこれまでに至る経緯をうかがったり、お姉さんの清美さんに民族舞踊を教わったりして、充実した時間を過ごすことができた。私にとつて印象に残ったのは、勲さんの向上心の強さである。「残存能力の活用」という言葉がある。高齢になったり怪我をしたりして身体が不自由になってもまだ残っている能力を使う、という意味だ。まだ残っている能力があるのに寝たきりや引きこもりになってしまう高齢者や障害者が日

本には数多くいるという。

その点、勲さんは、残存能力を最大限に活用しているといえる。首から下が動かないという状態でありながら、自ら曲を作り、台湾原住民族の文化を伝承しつつ広める、という大きな役割を果たしている。

もちろんそれは、お姉さんの清美さんをはじめとした周囲の方々のサポートがあつてこそ成り立つものだろうが、講演で各地を回ることは同じように障害をもつ人に勇気を与えることにもつながるはずである。今回の旅も、台湾からニュージーランド、ラバウル、フィジーなどを旅された末の来日と聞く。今後も強い意志をもって音楽の普及活動や講演を頑張つて続けていってほしいと思う。

(とみた なおや・比較文化学科3年)



車椅子で講演する林さんとサポートするお姉さん

◆つる子どもまつり◆

5月21日(日)に、第37回「つる子どもまつり」が開催されました。「地域交流センター通信」6号では35回を迎えた「つる子どもまつり」を特集しましたが、今年は外国の方も参加され、いよいよ盛んになってきています。(編集部)

姪っ子たちとともに

田中 三義

子どもまつり当日は晴天に恵まれ、青空の下子どもたちの元気で楽しそうな声が響き渡っていました。

「くに企画」では、例年行われているものや新しい企画などが行われていました。教室から子どもたちの楽しそうな声が聞こえてきて、大盛況だった。子どもと一緒に楽しんでいる大人の姿もあり、自分も姪っ子たちと色々な「くに」を回りながら、子どもの元気な姿と笑顔に触れ、楽しい時間を過ごすことができました。

午後にはグラウンドで、手作りのカラフルな衣装を着た子どもたちとダンスを踊り、楽しむ子どもたちとともに、充実した一日を過ごすことができました。

当日に書いてもらったアンケートを今後にかけて、より魅力溢れる企画が行われていくことを期待しています。

(たなか みつよし・市民・子どもまつり歴8年)

子どもたちの優しさに感謝

梁島 一恵

息子が生後7ヶ月だった去年のこと。「子まつり(つる子どもまつり)に連れて行くのは早いかな?」と思ったが参加してみた。が、この思いは杞憂(きゆう)に終わった。息子は年上の子が話しかけてくれるのを聞いたり、抱っこしてもらって喜んでいました。

今年は、小学生たちが「花いちもんめ」の輪に誘ってくれ、母と一緒に遊んだ。子どもたちの、小さい子を思いやる優しい気持ちに感謝した。

子どもまつりは異年齢の子どもたちがごちゃまぜで遊べる貴重な機会。ずっと続いて欲しい。

(やなしま かずえ・元都留文科大学児童文化研究部員・現在1才8ヶ月の子どもの母)

「ことばのくに」を企画する

関口 幸恵

「都留詩友会として「くに企画」を立ち上げて、もう何回目になるだろうか。

「ことばのくに」では、「花いちもんめ」や「かりゅうどさん」などの伝承あそびをした。子どもたちはお互いに胸に下げた相手の名前を呼び合いながら、学区や年齢の垣根を越えて、のびのびと楽しんだ。

今回は参加人数も70名を越え、父母、高校生、外国の方なども輪の中に入った。例年になく盛り上がり、持ち時間をオーバーした。

学生と共につくる「つる子どもまつり」は都留市の誇りとも言うべき企画だ。

(せきぐち さちえ・都留詩友会)

「おもちゃのくに」を担当して

小林志げ美

○ しんぶんあそび

一枚の新聞で「たこ」をつくり、ヒモをつけ、たこちゃんとお散歩をして遊んだ。新聞一枚から工夫することで遊具になり、幼児の教材にぴったりだった。

○ 引き出しのデザインあそび

折り紙、マジックで上ブタを自分なりに工夫して飾るコーナー。参加者は幼児から高学年までそれぞれが楽しみながら完成させていた。作品は袋を与えたため大切に持ち帰った。家で活用してくれるとうれしい。

○ シャボン玉だまし

細い七色の光るテープを割りばしにつける作業は細かいが、指導員がていねいに教え全員が完成出来た。色の変化、こわれないシャボン玉を楽しんだ。

○ 割ばしテッポウ

会員さんの息子さんがコーナーを作り、男の子に人気。

以上四つのコーナーがあるため、自分の興味のあるものを見つけ、指導員との交流を楽しみながら挑戦していた。来年も子どもたちと共に楽しむ企画を考えたい。

編集後記

○私たちの地域交流研究センターの諸実践もこの「通信」も、目的や内容・方法自体を探究しつつということですが、自主的精神そのものに根拠をおいて進めております。これがもし外部機関や公権力の指示と査定に基づくことになれば、その生命力は深部から萎えていくことになるでしょう。先の国会では教育基本法「改正」案が提出され、継続審議という扱いになっています。とくに、「改正」案が言う第十条（教育行政）の原則の180度の転換は、教育・研究と文化の源である人間の自由の精神を否定することに直結します。このことは諸個人の政治的立場を超える原則的問題であって、とりわけ教育・研究に携わるすべての者にとって無関心ではあり得ません。

○学生アシスタントティーチャー（SAT）の学生たちの声を読みますと、都留の子どもたちと若い学生たちとの、柔らかな交流の世界が垣間見えてきます（特集2）。興味深いことですが、この若い世代の内面は、フィンランドの高校生たちの伸びていこうと模索するハートと共鳴するものが感じられます（特集1）。都留では、37年間も自主的に子どもまつりが営まれています。「都留市民にしかできない特色ある教育を」（巻頭の富山克彦教育長）という思いを、さまざまにつないでいきましょう。

○「つみ木広場」シンポジウムは、多彩な層の多くの人びとの関心呼び覚ましたようです。大田堯元学長や「ほんごう子ども図書館」のスタッフも参加され、つみ木を楽しまれました。

○都留の着物ファッションショーが3年目を迎えました。箆笥の奥にしまわれていた着物がリフォームされ蘇えるのですが、その着物への思いや由来などが一言添えられるのでした。都留文大の学生も、モデルとして参加していました。（トピックス）

○年2号発行体制に移行して矛盾が現れてきました。台湾原住民族の林豪勲さんの死去の報は衝撃でした。昨年12月の講演のときに、若葉の頃にはこの通信で紹介しお送りしますと約束していたのです。そのときの林さんの親しみに満ちた表情が忘れられません。（トピックス）

○次号は、「都留フィールド・ミュージアム」（仮題）を特集する予定です。●

（編集長・畑潤）



絵・成瀬洋平（本学比較文化学科大学院2年）

地域交流センター通信 第10号：2006年10月25日

編集：都留文科大学 地域交流研究センター・通信担当（今泉吉晴・田中孝彦・森博俊・畑潤・田中夏子・西本勝美・船谷貴史・北垣憲仁）

発行：都留文科大学地域交流研究センター

〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 tel.0554-43-4341(代)

統括編集者：北垣憲仁